

入選

『じやりじやり』

直人和也

じやりじやり。

その音を聞きながら、坂道を登って僕は毎日、学校へ通っていた。

六甲山の麓にある小学校まで、子供の足で歩いて30分くらいかかった。

その通学路沿いに、いくつかの新築一戸建てが建築中だった。記憶も曖昧なのだが、おそらく一年くらいの間、セメントを捏ねる音が度々聞こえてきた。

耳心地のいい音ではない。でも気になった。

音が聞こえてくる方をみやると、ふっくらとした黒いズボンを履いた小父さんが長いシヨベルを握って、地べたにある平たい箱の底を削るような音を響かせて格闘していた。

朝、決まって同じ時間帯だった。その小父さんと、ふと目が合うことがあった。

短パンにランドセル。首から襷掛けに水筒をぶらさげた僕を見て、小父さんは笑顔でコクリと頷いた。

たぶん小学三年生くらいだった。僕は小さく手を振って返しはしたが、なんだか恥ずかしくなって小走りに坂を登った。

夏休みが近づいた。

その日、小父さんは木陰で休んでいた。授業は午前中までで、下校途中だった。

小父さんは同僚の若い職人さんとふたり、路面に腰を下ろして休んでいた。熊蟬や油蟬の音が混ざり頭上から降って喧しかった。

「ぼく、ちょっとお願いがあるんやが」

初めて小父さんの声を聞いた。立ち上がり近寄る小父さんの額に、うっすらと白い粉がついていた。少しだけ怖かった。

「ぼくが提げてる水筒のお茶、ちょっとだけ貰えんかなあ」すまなさそうに言った。

「えっ、いいけどあんまり残ってないかも」

僕はそろそろと、アトムが空飛ぶ姿の描かれた水筒を差し出した。

小父さんは、水筒の蓋をとってゴクゴクと飲んだ。ふ〜っと息をついてから、傍に座っている若い男に向かって言った。

「やっぱりお茶は上手いなあ。さっきお前が買ってきたアイスクリンじゃ、渴きはぜんぜん癒えやせん」

僕に水筒を返して、「ぼく、ありがとう。助かったわ。思わず全部飲んでしまおうた。悪かったなあ」

小父さんは額の汗を拭って言った。

「ええよ、家までそんなに遠くないから、僕は大丈夫やから」

それから建築現場の前を通る度に小父さんを覗いた。気付いた小父さんは時々、風船ガムや飴玉をくれた。

「これから学校やもんな、見つからんようにしてな」

小父さんは頑強で、誠実な瞳をしていた。いつも笑っていた。

小父さんが作る家は、雨や風に負けない強い奴に違いないと思った。

コンビニなんてない。それどころか、お店でお金を出して水を買うという習慣さえない。

昭和40年頃の話だ。

通学路の新築現場には時間差で十数軒の家が次々と建った。白い外壁は付近の家々と較べても格段に洒落てかっこよく、目立った。

近代的な住宅の区画が誕生したが、いつのまにか小父さん達はいなくなった。

じゃりじゃりと、硬い鉄の底を擦る音だけが僕の耳深くに残った。

その音の記憶が蘇ったきっかけは、意外だった。

僕は50歳半ばを過ぎていた。自動車雑誌の仕事をしていた。

スカイラインの特集本を作っていた。

スカイラインの父と呼ばれるSさんにお話を伺うため、横浜のオフィスを訪ねた。同年輩で仲のいい評論家と一緒にいた。彼もSさんの年齢を考えると早いうちに一度じっくり話を聞きたいと考えていた。

Sさんは年齢を召されていたが、相変わらず恰幅がよかった。

僕たちは箱スカ、ケンメリといった名車の誕生秘話を聞いたかったのだが、話は意外な方向に向かった。

正直、行方が読めないまま時間が過ぎた。

Sさんが自動車会社の仕事に就く前の話だった。Sさんは大学教授の紹介を受けて建築会社に就職することになったという。

機械工学部で学んだSさんは、建築についての知識がない。ある日、上司に橋を造る現場に連れていかれた。Sさんができそうな事は何もなかった。でも幾日か通ううち、唐突

にまるで違う方向の提案をしたという。

セメントの捏ね方についての提案だった。

Sさんは毎朝、忙しい現場でコンクリートが大量に作られる様子を眺めていた。その日その日の天候に左右され、作業の進み具合も読めない中、コンクリートを捏ねる作業は常にスタッフを混乱させていた。無駄を省いて作業員を助け、貢献したいと思った。

会社の役員に設計図を渡した。

トラックの荷台にセメントを捏ねる丸い筒を乗せ、クルクル回しながら走ってコンクリートが固まらないようにして作業現場まで向かう。コンクリートミキサー車の設計図だった。

役員は目を丸くしたが、アイデアは採用され、間もなく「お前はここに行け」と自動車会社を紹介されたという。

「天才だ。情熱の人だ」僕はそう思った。

予定していたクルマの話は十分には聞けなかったが、今日は随分得をしたと思った。

帰り道、自分でも不明なのだが、耳にかつてのじやりじやりの音が蘇ってきた。

あれは、男が懸命に造りものをするときの情熱の響きだったんだと思った。

セメントに砂利を混ぜて作るのがコンクリートで、小父さんが作っていたのは、セメントに砂を混ぜて家の壁に塗るモルタルだというのは、帰ってから調べてわかった事だ。

セメントに込められたスピリッツがある。

じやりじやり。

情熱が混ざり合う音。

僕は目の前の家々を眺めながら歩いた。